

参加者一覧()2
連作欄 8首の連作 自由詠)4
テーマ詠欄「学」	26
ー首評「そらよみ」	34
短歌リレーコラム「望遠鏡」	36
リレーエッセイ「いちごいちえ」	38
次回予告・編集後記	39

うたそら 第4号

発行: 2021.09.01

編集・制作:千原こはぎ

@kohagi_tw http://kohagiuta.com/utasora/

次号からうたてらり

連作欄 8首の連作自由詠

ー首評「そらよみ」 短歌リレーコラム「望遠鏡」 リレーエッセイ「いちごいちえ」



投稿先等、 詳しくはうたそらの ご案内ページを ご覧ください



http://kohagiuta.com/utasora/

第5号 21 10/31(日) 24時

●8首の連作自由詠 ●テーマ詠「食」1首

第6号 21 12/31(金) 24時

●8首の連作自由詠 ●テーマ詠「暮らし」1首



今日から9月! 秋を感じるような涼しさが続くなと思えば、また夏まっ盛りの暑さ。 各地での突然の豪雨など、相

変わらず気候の安定しない日々ですね。コロナ禍も落ち着くどころかますます感染と混乱が拡がり、早く平穏な日々が戻ってほしいと願うばかりです。皆さまいかがお過ごしでしょうか。

このたびは短歌誌「うたそら」第4号へのご参加、ありがとうございます。ご寄稿くださった皆さまに心より感謝申し上げます。第4号の参加歌人さまは99名、連作欄には72名、テーマ詠には81名のご投稿をいただきました。

今回のテーマ詠のお題は「学」。ノスタルジックな情景や、現役学生さんによる眩しい「いま」の切り取り、学校以外で得られる学びなど、さまざまな「学」の短歌をお寄せいただきました。

また、短歌なリレーコラムでバトンを引き継いでくださったのは天野うずめさん、リレーエッセイは泳二さんが書いてくださっています。

今号も皆さまのおかげで読み応えたっぷりの「うた そら」をお届けできます。どうぞごゆっくりお楽しみ ください。

「うたそら」では Twitterでの呟きもお待ちしております。「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をお聞かせください。

次号は10月末メ切の11月初旬発行、テーマ詠のお題は「食」です。食欲の秋、おいしいものでいっぱいのすてきな作品を楽しみにお待ちしております!

編集鳥 千原こはぎ





- 35 - - 2 -



ある。 章を書こうと思う。テキストブック、 ト」という言葉をテーマに摘ませていただき文 chari さんが前号で書かれた短歌から「テキス 教科書で

と今書いているこの文章もこれまでに読んでき 本を読むのは小さいころから好きだった。きっ あまり読むことはないが自分の作る短歌にも影 歌集や短歌に関する本もいくつかは持っていて、 たいろいろな本から影響を受けているのだろう。 のだけれど、生憎そのような本が思いつかない。 人生で教科書となった本でも紹介できれば良い せっかくいただいた機会なので、これまでの

> 抵抗があるのだ。 きたものなのでそれらを「教科書」と呼ぶには たくさんあるのだが、全て楽しむために読んで 今の自分の基になったり影響を与えられた本は 好きなのはそのせいだと思う。そんな具合に、 鑑を見るが好きだった。今でも昆虫や生き物が 響を及ぼしているかも知れない。幼いころは図

ら良い出来で、 になっているというものだ。科学の教科書に書 に選択肢や分岐があって、本そのものがゲーム ムブックというのは最近は見かけないが、 これを教科書の余白に書いたこともある。ゲー た。当時ゲームブックというものが流行して、 キン肉マンの超人やパラパラ漫画が描かれてい 教科書は、 ご想像のとおり僕は勉強も教科書も大嫌いだっ いた担当教師をラスボスにしたゲームは我なが 中学の頃、友人と教科書を交換する遊びをし 学生時代の本当の(?)教科書のことを書こう。 小学校高学年から中学校時代のほとんどの 文豪の顔には落書きがされ余白には 友人にも好評だった。 物語

- 34

授業中に相手の教科書のどこかに落書きをして たことがある。授業が始まる前に交換をして、

> と赤い染みが残ったままだった。 見たのはこの時だけだ。地理の教科書にはずっ たのでそのまま教科書を閉じ、授業が終わると 何かに入っていたものだろう。ひどい匂いがし とをやり出した。ある時返ってきた教科書を開 ジを黒く塗りつぶしたり切り抜いたりというこ をつくことだけが目的になり、しまいにはペー びはエスカレートする。だんだんと相手の意表 描いたりという程度だったが、当然こういう遊 するにいかに授業中に相手を笑わせるかという 落書きをされたかを探すという遊びである。要 返し、次の授業時間に返された教科書のどこに と詰め寄った。涙を流して笑う人間を目の前で すぐに友人に「さすがにこれはあかんやろ!」 くと紅生姜が挟んであった。弁当の焼きそばか 口にしたり、 のが趣旨で、始めた頃は正岡子規の写真をピエ 歴史的な写真の背景に卑猥な絵を

ただの教科書にまつわるひどい話。 いるのかも知れない、などと言うつもりはなく、 この頃の思い出が僕の人生の教科書となって

泳 二

黒板の上半分を真っ白に塗っ たたぶ ん空の つもりだっ

ともえ夕夏	堂那灼風	月硝子	chari	千原こはぎ	茅野	竹林ミ來	瀧口美和	高田圭	多香子	たえなかすず	セサミスペース M	せいや	寿々多実果	白石 夜花	雀來豆	西鎮
@croissant_hey_z	@shakufur	@gesshodo	@greenchari2	@kohagi_tw	@white22autumn	@chik325	@abcdefghijklmiw	@tanka_trp_kei		@suzusuzu2009	@sesamespace_m	@petitchante	@guzura4227	@yohana_no_sekai	@jacksbeans2	@xi_zhen_ivUT
まさけ	細川エリカ	藤田美香	福山桃歌	深見あす香	廣珍堂	平本文	ヒプノ寿司マイク	雞河麦	玻璃砂丘	早月くう	薄荷。	ネコノカナエ	西村曜	西淳子	にう	成瀬悠
@mskpompomfuwa23	@luvluvkasen	@w_isana	@momoka_fukuyama	@asu_tanka	@Hirochin_dos	@VQv9R1Rpeza0Vh7	@xHksbNR4wv1wj8M	@may_spica_358	@@fox0426onigiri	@k_hayatsuki	@aie0himeco	@nekonokanae_uta	@nsmrakira	@Jacky244Ray	@yuru11ne1217han	@naruse000yuu
		渡邊知博	龍翔	夜夜中さりとて	ゆりこ	ゆや ゆき	結川澄衣	もんそん	村田一広	六厩めれう	六浦筆の助	虫武一俊	深影コトハ	三浦なつ	御糸さち	真野ありか
. .			@oppizuntsuan	@yorusari	@b7282e_akaneiro	@yuya_yuki_tanka	@sui_musubu	@monsontanka		@mereumumai	@Tohakumutun5057	@mushitake	@cotoha_mikage	@natsumiuraok	@MEATsachi	@o_shironec

中村成志

@nakam8

茉城そう

@maso31_

- 3 -



終了の合図ではなく絶望を感じる為のチェックメイトだや出アルと牛乳みたいになれる訳なくて最初の罪を犯したりリームに紛れた蝋を食べたって分からないだろ いい人ぶるな情重に火薬を詰める僕たちを狂わせるあの夏が来るから慎重に火薬を詰める僕たちを狂わせるあの夏が来るから情重に火薬を詰める僕たちを狂わせるあの夏が来るから情重に火薬を詰める僕たちを狂わせるあの夏が来るからないたろ いい人ぶるなりリームに紛れた蝋を食べたって分からないだろ いい人ぶるなりリアルと牛乳みたいになれる訳なくて最初の罪を犯したシリアルと牛乳みたいになれる訳なくて最初の罪を犯した

目が線になる

赤井枝乃

空白をただ抱きしめる 本当は抱いていたくもないはずなのに おのずt know u wanna be alone 歪んだ今すら愛してみせる I don't know u wanna be alone 歪んだ今すら愛してみせる 信仰を捨ててしまいたい夜さえあなたの星は綺麗に光る とこが好き もう見ることはないのだけれど 変白をただ抱きしめる 本当は抱いていたくもないはずなのに

いる。とこんなにも悲しいのかという気持ちになって

心ふるひぬいまはしき恋のかたみと乳の上の刃の傷痕にりし胸ふと思ひ出て

できない苦しさがあったのだと思う。 この二首は原阿佐緒の実体験を詠んでいる。恋愛関係にあった、小原との恋に突き進んることが原因であった。小原との恋に突き進んでいた原阿佐緒は、事実を知り、深く身も心もでいた原阿佐緒は、事実を知り、深く身も心もでいた原阿佐緒は、事実を知り、深く身も心もでいた原阿佐緒は、事実を知り、深く身も心もでいた原阿佐緒は、事実を知り、深く身も心もでいた愚かさといったものが、簡単に消えないたものに残かさいた。その現実は想像できない苦しさがあったのだと思う。

ネ君なりしかな 君なくて吾生きがたく吾なくて生きがたして

ま生きてはいけないだろうという一連托生の考 できないように、私なしで生きられない君であっ できないように、私なしで生きられない君であっ でほしい。「君」と「吾」との結びつきを強く意 ではしい。「君」と「吾」との結びつきを強く意 できないように、私なしで生きられない君であっ できないように、私なしで生きられない君であっ できないように、私なしで生きられない君であっ

語る一首のようだ。るのではないか。激しい原阿佐緒の恋愛観を物はしき~」の歌の根底にある考えを表現していえに似ている。前述した「かみそりを~」「いま

れかし君思ふ子に捨つといふすさまじきことするまへに毒を盛

だろう。 になり、 りも、 また、 たと言える。 れるのであれば、 恋しい人への依存心が強すぎるために、捨てら たいという考えに至ったのだろう。原阿佐緒の であれば、恋しい人が想っている子に毒を盛り ŧ ている人を指すネットスラングである。この歌 る「ヤンデレ」や「メンヘラ」に近いと思う。 「ヤンデレ」は、好意が強すぎるあまりに依存的 この一首は現在、 依存するあまり、恋しい人に捨てられるの 恋しい人に捨てられる恐怖のほうが勝っ 「メンヘラ」は、心に何かしら問題を抱え いわゆる病んだ言動をとる状態を表す。 原阿佐緒にとっては、 毒を盛るとの考えに至ったの 漫画やアニメなどで目にす 毒を盛る行為よ

ふは苦しかりけり恋などと名づくべきかはさはいへど秘めて思

いのではないか。例えば、友人が好きな人を密めるかどうかの感情は、今も百年前も変わらなおくにはとても苦しい。この恋をしていると認おくにはとても苦しい。この恋をしていると認恋愛にありがちな悩みをストレートに詠んで

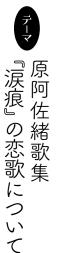
がないとこの歌を詠んで実感する。その苦しい感情は時代を経ても変わることに自分は黒子に徹するという物語は普遍的にあかに自分も思っており、しかしその友人のため

わかきひとり身男見て心うごかぬまじないを問やととはるる

男性を見て恋愛感情にならないようおまじなた。だからこそ、恋愛感情が芽生えないようなた。だからこそ、恋愛感情が芽生えないようなた。だからこそ、恋愛感情が芽生えないようなおまじないを唱える必要があった。さらに、未来がある若いひとり身であるから、これ以上、恋愛で苦しい経験を背負いこんでほしくないとの配慮があったのだろう。おまじないに頼るくらいに原阿佐緒の恋愛は辛いことが多かった。そのことは、原阿佐緒自身が一番理解している。それでも恋に落ちるのは、原阿佐緒の中で恋愛を重要な位置に置いていたからだろう。

以上のように、原阿佐緒の恋歌は現代でも共成上のように、原阿佐緒の恋歌は現代でも共れるが、その中に原阿佐緒も加えていただけれれるが、その中に原阿佐緒も加えていただけれいが多い。明治・大正期の恋歌を詠む歌人といえば、与謝野晶子や柳原白蓮が挙げらいたが、その中に原阿佐緒の恋歌は現代でも共いた。

今号のテーマと書き手さんは… 自由きままに書くページ短歌にまつわるあれこれについて





書き 天野うずめ

まったが、 ずつ読み進めていたので、半年ほどかかってし 緒全歌集』を先日読み終えた。昨年末から少し ない充実感があった。 何年か前に葉ね文庫さんで購入した『原阿佐 無事に読破できたことは言いようの

は現代の私たちにも通じる部分が多いと感じた。 使用しているため慣れていない人には読みづら しかし、 ている。 いかもしれない。さらに、原阿佐緒の歌集自体 いる第一歌集『涙痕』は恋歌が数多く収録され さて、 その 私は『涙痕』を読み、原阿佐緒の恋歌 旧かなや今ではあまり使わない言葉を 『原阿佐緒全歌集』に収録されて

> 考え、今回、このリレーコラムのテーマとした。 けに、原阿佐緒の短歌を知っていただきたいと そのため、このコラムで紹介する恋歌をきっか 人手が困難であり、 まず、『涙痕』について説明したい。『涙痕』 気軽に読むことは難しい

ている。 るように思う。 集には激しい恋心を詠んだ歌が多く収録されて 恥ずかしいほどである」と歌人の扇畑利枝に語っ たので、歌も調子に乗りすぎていて、今では気 集に関して「自分自身、おごりに充ちた日々だっ た第一歌集である。後年、 は大正二年、原阿佐緒が二六歳のときに出版し いる。この恋歌の根底には原阿佐緒の人生があ 原阿佐緒が語っているように、この歌 原阿佐緒は、この歌

阿佐緒の恋愛観の根底は『涙痕』の収録歌に垣 録歌を詠んだ時期とは重ならない。 緒が三三歳のときに起こったため、 関係はうまくいかず、アララギも退会すること が説得に訪れるほどだった。結局、石原純との 緒のもとには島木赤彦や斎藤茂吉、 恋愛は当時の一大スキャンダルとなり、 石原純との恋愛問題だ。妻子がいた石原純との 藤茂吉や島木赤彦に師事した。原阿佐緒の生涯 に生まれた。短歌結社のアララギに入会し、斎 になってしまう。 において必ず取り上げられるのが、物理学者・ 原阿佐緒は明治二一年、 石原純との恋愛問題は原阿佐 現在の宮城県大和町 『涙痕』の収 中村憲吉ら 原阿佐 原

間見えるように思う。

緒の恋歌をいくつか見ていこう。 では、早速、『涙痕』に収録されている原阿佐

秋の雨恋に醒めたる唇にふるるがごとくかな

鳴る胸のごと 春の雨傘にきゝよくふりそゝぐ君に逢ふとき

き合う。 秋雨、 目は恋に醒めてしまった相手の唇に触れる行為 を題材に詠んでいるが、 二首目は傘に当たる春雨の音が好きな人に会う 雨のあたたかさが胸の高鳴りに表現されている。 が秋雨のもの悲しさと合っており、二首目は春 でまったく違う雰囲気の歌となっている。 ときの胸の音に似ているという。 為が秋の雨のように悲しく冷たいものである。 首目は恋に醒めてしまった相手の唇に触れる行 右に挙げた二首は雨を題材にした恋歌だ。 春雨の季節感と失恋、片思いの感情と響 季節感が合わさること いずれも、 一首 雨

- 32 -

今日のあはれなるかな 待つといふ苦しきことを知らぬ身となりたる

感じられた。待つという苦しい行為を知らない つという行為が思っていたよりも苦しいものに た。今まで待つことをしてこなかったので、 今日に限って好きな人を待つという状況になっ つもは好きな人にすんなりと会えていたのに、 好きな人になかなか会えないという一首。 待

虎俊寛 人間だもの 新井きわ

晩夏の宿

夕立でとぎれとぎれに濡れている道のむこうに消えそうな虹 まだ町を抜けないバスに列をなす園児は手をふり手をふり返す 送迎のマイクロバスを待つあいだご当地ソフトひとさじ、ひとさじ 乗り継ぎのホームで一度手を離す 手花火に照らされ浴衣の横顔はすこし日に焼け汗ばんでいる お茶請けと花火セットと色浴衣の引換券にほころぶくちもと トンネルをひとつ潜っただけなのにワイパー跡の対向車線 ゆびさきにつままれているひとかけの冷凍みかん近づいてくる 下り列車はすこし遅れて

新 井 将

水

真夜中に正しい呼吸知るために額をあてるわたしの儀式 水槽に凭れて読んだ短編の少女がついたはじめての嘘 両腕で水槽抱え方舟がちゃんと岸辺に着きますように 水草をながめる子らは人類の先祖返りを記憶にしては 留守番の午後はさみしくないように両手放しの水草ありて 水槽が創造してる世界から抜け出したのはヒトだけでした 水槽に森をつくって番人となりし深夜はピアノと月と 新しい水槽運びこの部屋にひかり集めてうしなったものは

大人女子と呼ばれる四○歳にして子宮を失くす

児を産めぬ身体は雨を弾きたりおんおん泣くなおんなの輪郭 おみなからやっと自由になりました送る絵葉書は「人間だもの キャリー曳き彷徨うこの夜この街を誰かが灯す新宿東口 夜深く予定なき明日のためタンゴ聴きつつ赤きマニュキアを塗る もう君はパパにならなくていいんだよ膝を抱えてしいんと夜更け 今はもう激しく叩く雨より聴きたきは狂おしきアヴェ・マリア 明日からどのジェンダーになるのだろう未生のわたし手術台に横たわる 師走のサイレン

夏の断面

有 村 桔梗

遠花火 さみしさをぎゆつと抱へてあゆむときひとはほのほになるのだらうね さるすべりのちひさき花はちらばつて夏の終はりをしづかに照らす 降りつづく雨のしづけさ さみしさを集めてしまふ臓器を思ふ 夢ひとつ見送るやうに醒めぎはのひとの睫毛はすこし震へて すこしだけ鳩を経由しうつくしい狛犬を撫でにゆくための旅 ゆくりなくかなへびがゆくまひるまのわたしの影をしゆるりと抜けて ソルダムを囓るきれいなはならびが見せつけてくる夏の断面 ひとりのひとをまなうらに棲まはせてゐる夏のさいはて

- 5

読書と食事

破り捨てた写真のすべてにわたくしを咎めるような夏の海あり 花火って花に喩えてしまうから空に枯れゆくようにさびしい 八月の終わり夜風を受けながらあなたを敵に回したくない アンデルセンの童話のように永らえて一度も鮫を見たことがない 蝉時雨果ててこの世のどこまでもどこまでも夏の香に包まれて マン・レイの写真のなかに八月の夜とあなたは素裸でいる 剣道着の青年風のごとく来て海への道を尋ねてゆけ くれないのアルファロメオが海よりもまぶしき夏の午後を過ごせり

泄 \blacksquare 章 男

夢

動物園にマンモスいたから狩っている 日に二度もしっぽがほしい アリジゴクはアリがアホなら破裂する そのフォー 長湯してゆびいっぽんだけしわよらず 火と若葉のあいだの水がいなくなりふたりは燃えて今は黒髪 ヘボテンは夜息をのむ山嵐の静かな寝顔があまりにきれいで ンに手足が生えて柄がくねる柄がなくなるまでは使おう クよく刺さるでしょう まいったな、昨日の雨で莢がはじけた 一直線に飛び込んだ海鳥です まさかこいつがネバーランドか あの時のせたおたまじゃくしだ 腹が減っても象は食えない

> 猫にも仏性はあるかというたとえについ 泉 葉子

> > - 6 -

蚯蚓かと思えば守宮昼食は麻婆豆腐とチューハイを飲む

豚肉のウィンナープラスカレー汁プラスシーチキン卵焼きの昼 トーストを食べるのが辛い朝に飲むミルクは川でヤクルトは海 劣化するフライドポテトを食べながらチー

トな奴は誰だと思ふ

立ち読みは厳禁なのかもしれなくてゴッホに関する現代詩読む

髪の毛は人の意識を苛立たせ返却日を前に鶏肉の唐揚げ

寿司食べる前にはパンを食べるなと吟遊詩人に言われた気がする 「宝物」「神の子犬」と「甘い水」「くびすじの欠片」と「詩の礫」読む

無力だと知っているからろうそくの灯りをあなたに少し傾けた 小さな痛みを噛みしめ朝日から目をそらす君は悪くないよ 待っている下手な口笛吹きながら星が焼け落ちここが終わる 食べて寝て撫でられて鳴くぼくはそれほどなにも思わぬ あの瞳が夜空のようでうっかり誰にも言えないことを話した 黙って街灯の虹を見ていようどんなあなたでも構わないから ここまでは逃げてこれたよもういいよ食べきれないのどうしてもだめ 怪我をした動物は皆同じ穴の狢あなたの寝息をなぞる σ

レは スのきみが歩めりつなつの雨のにほひの野の道を白 いド

龍翔

なるような美しい光景だ。その道を、白いドレス姿の人物が歩いている。 きっ と一面の緑が広がる野の道なのだろうと思う。 絵に

目まで読んでから読み返すと、 う感慨が生まれてくる。 しかしこの短歌は連作のうちの一首目であり、 それまでとはまた違 八首

何度も読み返したくなる奥深い短歌だと思っ た

一首評

こうげつしずり

一首評

安な遊び自転車の鍵を毎朝放り投げ放課後探す不

かかる遊びだかれる遊びだい

で

赤止めて水道代の

御糸さ

ち

宇祖田都 子

ているうちに、すっかり作者とこの歌のファンになったいるうちに、すっかり作者とこの歌のファンになったしい。「不安な」とは誰にとっての不安なのだろう?も放り投げておこう。そしてもうひとつ。漢字の多も放り投げておこう。そしてもうひとつ。漢字の多い短歌を読むとどうして不安になるのだろう?をわれも織り込み済みなのだろうなぁ?などと思っているうちに、すっかり作者とこの歌のファンになっているうちに、すっかり作者とこの歌のファンになっているうちに、すっかり作者とこの歌のファンになっているうちに、すっかり作者とこの歌のファンになっているうちに、すっかり作者とこの歌のファンになっているうちに、すっかり作者とこの歌のファンになっている。 てしまった。

雀來豆

一首評

連 れ うゲ だって来る孫もなく老人が静 ムセンター かに集

を遊撃手なるひと守るらしあらわなる背に触れている

このあたり

五十子尚夏

橘高な っ

ここではその孫が「なく」、私の中のおじいいさんもしくはおばあさんが立ち現れる。だって来る孫」によって、頭の中には孫とだって来る孫」によって、頭の中には孫とこの一首に目を落したとき、最初に目に入 人が若者と音に満ちていると思われる「ゲーばあさんは急にひとりになってしまう。そう もの悲しく異様で、 **巡しく異様で、その異様さゆえにくすっと笑えという場にぞろぞろ集っている様子はどこか** い歌だと思う 頭の中には孫とそのおじさ、最初に目に入る「連れ 私の中のおじいさん/お しかし、 ムセン いう老

の真ん中辺り、そこをしなやかな指が優しげに撫でまれた背の部分が内野、遊撃手は左肩甲骨の下斜辺背中でそれを表すとしたら、左右二つの肩甲骨に挟

背中でそれを表すとしたら、左右二つの肩甲骨に挟=ショートは、二塁三塁間にいらっしゃるらしい。背、です。野球はあまり詳しくないですが、遊撃手

背、です。野球はあまり詳しくないですが、遊撃手お歌に示されている背は何にも覆われていない裸の

渡邉知博

一首評「そらよみ」

一首評

詩

季

一首評

像が膨らむばかりです

いるのでしょうか。誰の背中?

いつ?どこで?

六浦筆の助

な動作にも思える「あそび」がなくなり効率化ばかりめお湯は出しやすくなっている。楽になった反面、無

むかなしさもどこか感じさせる、考えさせられる歌だ。

く機会も少なく、自宅の風呂もスーパー銭湯も節約の

を交互に押してくろうしたものであった。

今は銭湯に行

お湯でタライに適温のお湯を溜めるのに赤青のボタの洗い場は青いボタンの蛇口が水、赤いボタンの蛇口 の洗い場は青いボタンの蛇口が水、赤いボタンを読んで首をかしげる方も多いのではないか。

瞬旗の上げ下げの遊びなのかなと思わせるが、下の句

- 31 -



気になった一首をとりあげて 200文字くらいで語る 前号の 一首評のコーナーです 「うたそら」 から

夜の永久機関蟹 わたくしの の 眼に燃え尽きて ゆく夏の

五 - 子尚夏

ろうか。歌人の自然に対して感じた悠大さが感じらな生命自体、宇宙のいとなみという永久機関なのだまれる気がする。生滅流転し栄枯盛衰するさまざま むしろそうであって欲しいという歌人の願望すら含点滅して、夏の時間をとこしなえに感じさせるのか、の夜の永久機関だと捉える。蛍は無限に湧くようにえ尽きてゆく」のだろう。しかし、歌人はそれを夏 れる爽快な歌である。

大坪命樹

続けている扇風機生きている人が近 くに いなくてもまわり

か

らだじゅうポでございますラ

メン

を

ろだたけ

にも用いるが、ただ風を送るだけのこの機械は「生的とするエアコンならば他の動植物(なんなら遺体)島が微妙にずらした角度で照らされ、それぞれの歌景が微妙にずらした角度で照らされ、それぞれの歌結句が「扇風機」で統一された連作。当たり前の風 るしかない。読み下した時の淡々とした流れが、そ命じない限り、対象が居ようが居まいがまわり続けきている人」のためだけに作られた。そして人間がにも用いるが、ただ風を送るだけのこの機械は「生 の皮肉と可笑しみを引き立てる。

中村成志

一首評

(?)が感じられました。

一首評

そさ れい は山崎パンの は ひ、 7 n はず トラ ッ ፠ ク W Þ はら か で

小 泉夜 雨

のトリガーとして配置されているように思えた。四音と読点で構成された初句は、その肯定的な感情感を生んでいることに惹かれた。〈さいはひ、〉と、

一首評

西鎮

一首評

ラー メンスー プから剥がしてる 御殿山 みなみ

西淳子

- 30

ひとつの悲喜劇があわたくしという映写 という映写機が 3 姎 出すたっ た

佐藤氷 魚

ない。上質な映画だったかどうかは終わったときに乗っていて、どこでどんな展開があるか想像もつか喜劇」。良いことも悪いことも一筋のフィルムの上にきたら喜劇、というのではない「たったひとつの悲かんではなく映写機に自らをなぞらえた。悲劇に飽ルムではなく映写機に自らをなぞらえた。悲劇に飽 来るあの映写機のほうだろう。作中主体は映画のフィが、我々が思い浮かべやすいのは小学校の上映会に映画館といえばいまやデジタルが主流なのだそうだ 視聴者が決めてくれる。

六厩めれう

私のことも忘れていいのに

ラ

イラッ

ク

透明の超えちゃいけない壁がある この先は自分で歩くね 大丈夫、すこし前を行く人もいる 鍵忘れ財布忘れてヘルプコール くるい咲く藤の花をゆきすぎて凪いだ水面を愛と呼ぶなら 波を見るあなたの後ろを歩いてる マスク越し 無事です 咳つのる母の背をあたためて家を出る日を決めた夏の夜 か 繰り返してる「好きです」の想いが重くてフィルター おんなじ空を生きて いる かたちにしても、 いつ帰るのと言い出せぬ夢 連絡先も知らないけれど こころにしても 止まり

藤す みこ

フ

オ

エ

バ

ヤング

ぜい 美しくなりたいのですこそこそと田中みな実の連載を読む 自打球に 丁寧な暮らしと称しとこしえに枯れない薔薇を逆さに吊るす 無花果に棲みつく蟻をよけながら無心で食べる無花果と蟻 明日もまた空気を読まず昇る陽よ赤茶けてゆく茄子の浅漬け ミョウバンの入った水に浮かぶ茄子あしたのジョ たくな殺戮をするきらきらとこぼれいくらを匙で掬って 0) びくともしない り越し苦労からっぽの湯船を埋めるほどのかなしみ 事務員が紙決裁を持ち回りする -はまだ生きている

> 屋上獏部 IV

<u>| S | </u>

宇 祖 \blacksquare 都 子

かき氷急いで食べてキーンとした顔してみんな獏にそっ 肩甲骨から尾骶骨まで覆いバク柄になる日焼け大会 これよりももっとやわらかい 屋上をドクター 屋上でゴロゴロしてる獏たちを塹壕として死守すべきもの 屋上を地下一階と呼ぶときに獏と夢とはもっとも近 屋上という感情を象って獏が創られたという神話 学校は獏ではないが獏が棲む熱くて昏いぬかるみだっ ヘリに見下ろされ生理食塩水味のグミ んだよと獏の足裏をつっ た つく先輩

ライブ Л 力

泳二

ブランキー SOS! SOS! って聞こえてる?発煙筒を窓から出 ものすごいスピー ドライブに行こう二人でアクセルは私あなたはナビと音楽 今さっき食べた辛 いろいろなものが壊れてなくなって笑うルパンの車みたい の前のガラスのひびを指さして地平線?水平線?めざそう たことのない歌をふたりで歌う見たことのない家に向かっ ージェ ットシティの夢をみて目が覚めても走ってますように ・ドで追い抜かされて「オ いの がおい しいベッドが小さすぎてかなし タニみたいだね」って誰それ して て

- 7 -

波の音の涼やかなれば音楽を好むきみ聞く海鈴なるかな 松太枝に着飾るきみと水浴みて古るれど青春生き初みをるかなまった。 登山せんと海にて焼けし背中もてリュックを担ぐ カットした宝石のやうと云ふきみの眼に映りをる海はいかにぞ 雨晴海岸なれど青空に峰々見えず雲ばかりなり 海水に涼まんとてもバーデンのごときぞ 富山にてきみ初見せしテトラポッド 浜茶屋のテラスにこほりを二つ待つ たれかの若き思ひ出のごと 泳ぎゆく島とて面白しや 火傷を湯治すべきか あな痛きかな

澤ほの か

糸を編む言の葉を編む 歌と句と両方編んでいることは言葉の神さまのお目こぼし 「五・七・五」それでとどめておきたくてでも「七・七」と続けてしまう 言の葉を編むのも同じ 寝ぼけてて頭がはたらかなくても手が覚えてる 何本となく編み上げたマフラーは誰の首もとを飾っているか 糸を編むことを覚えて十五年 すっかり「趣味」と自慢ができる 一滴の水が大河となるようにモノへと変わる一本の糸 いつのまにか「ごおしちごお」とリズムを刻む それはもう私の生きる証ともなる そういうもので

> 夏の日のキックベースに交じりたる難聴の子のしずけさおもう 眠いこと話せば夜が終わるから ホップ ステップ ジャンプの瞬間に雲が消え風がさらった遠い夏の日 あのころのロビンフッドにトム・ソーヤ何処へ行きしか死にゆく夏に 〈ともだちになるためにひとは出会うんだよ〉僕らは出会わされたともだち 手話ソング覚えさせられそこにいる〈みんな〉の中の〈ひとり〉でありき キャンプファイアに輪をつくりたる十歳の手話ふくらみぬ八月の闇に ひまわりになってフライを捕る子らよ永遠で一瞬の夏である ランタンに寄る蛾のように まだ が

ね

- 8

入口と出口はちがうトンネルを出たらそこから遠ざかるだけ ただいまのトーンが高いそれだけで隣の家は幸せなんだ 軽やかにテレビと笑う人の食む茄子に刻んだ隠し包丁 切っ先に虹ふくませて切る茄子は痛いとさえも言ってくれない 使えずに腐らせていく野菜たち水が抜ければ身は軽くなる 簡単に消えてしまえる猫が嫌い 夏だから冷やし中華を食べる人それを見ているわたしの瞳 君の手が温かいから冷えているわたしの指がくっきりとする 消えない人はもっと嫌い

年齢に添った知識を学ばないまま足元に伸びてくる影

虫武

俊

修道院、 難民キャンプにフィンランド 本で旅して学ぶ「幸せ」

学びから離れてみれば美しき答案のごと光る図書室

まだ学ぶ前に子猫はみまかつて猫の数だけ大地が揺らぐ

村田

一広

K そん

六厩めれ

う

六浦筆の助

趣味欄に skateboard と書いている学生英語ぺらぺらである

算数は数学になるまだ私何かになれる気がしていない

学歴は関係ないという人の眩しい履歴吾に無いもの

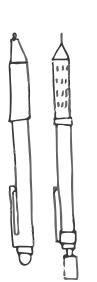
塀越えて無断下校をする昼のぶどうジュースの優しい甘さ

はじまりはサルでもわかる進化論入門がほんとにわかるサル

発音を舌が拒んでゐるやうで〈日本人〉 とうまく言へない

落日の学習室に焼かれてた彼はいつでも the third person







ゆりこ

ゅ

や

ゅ

き

結

川澄衣

夜夜中さりとて

龍翔

渡邊知博

同窓は 同じ窓辺でとどかない空を見たね の略だと思う

•

早

月くう

みそ汁をわざとこぼして掃除する過去のおれからさぼるを学び

物事は過程が大事と言う君にわたしからキス 学んでください

の洞門抜ける痩身の大学生ら股ずれ数多

箱根路

生きること死ぬこと そして恋をすること

舎の耐震補強が終わったと建築学科の女子

0

書き込み

学び

入学の子ら並びをり散髪の頭は学の形にも似て

放課後の風は自由で折り畳まれてい た羽を広げ飛び去る

放課後のグランド駆ける点pを追う目が描くハ 卜 曲 線

夏の死を告げる言葉で満たされた学力テストにやられる9月

どこまでも渇いた砂を持っていた浸みとおる雨まだ足りなくて

幼稚園も学校もない 毎日に動物園となる我が住処

「あ ŋ \mathcal{L} と蟻を追いつづけるきみはとても小さな生物学者

ウペンちゃんに褒められたって新学期前に日本脱出したし

コ

平本文 廣珍堂 雛河麦 玻璃砂丘 ヒプノ寿司マイク

深見あす 香

福

山桃歌

細 Ш I リ 力

さ

け

真 野 あ ŋ か

御 糸さ 5

三浦 な つ

深影コト $/ \setminus$

ガウンテスト

1 井戸

菊 泄 洋

二回目のガウンテストも合格すクラスターになりませんように 灼熱の入浴介助ゴーグルとマスク腰にはコルセット巻く ごみ袋代用にして間隙を縫ってガウンの着脱練習 滋賀県も感染者数増え続け近所の施設もクラスターに 二回目の試験をやると師長から通達がある夏の老健 看護師のダメ出しにただはいはいと応じておりぬ無駄口きかず 要領の良い職員は業務中試験を受けるサビ残はせず トルペットボトルに麦茶注ぎバナナも常備する午前五時

プラネタリウムに残され

河 1.岸景都

少しでも六等星を多くした空に会いたい特急に乗る 懸命に生きるつもりの僕たちも銀河の底の砂になれない 星たちを結んだ線を作りたいみんなに分かる白いインクで ひとりだけプラネタリウムに残されて宇宙が消える瞬間を見た 移りゆく十二宮だけ眺めては未来を託す雑誌のページ 罪深いひとの代わりに十字架をいくつもいだき夜空は眠る 暗幕で世界を覆う人がいて多分仕事は神様のはず いた光の名すら知らなくて星座早見盤求めたあの日

それらすべてを抱いて眠らう

勝

学級委員に誰かが推す一票それらすべてを抱いて眠らう 学食のお勧めにあるスタミナ丼それらすべてを抱いて眠らう 学習と科学の付録なら学習それらすべてを抱いて眠らう 良かれと思ひ小さき学生鞄それらすべてを抱いて眠らう 学校で教はらぬ担任の死よそれらすべてを抱いて眠らう 学生運動の負傷者と死者よそれらすべてを抱いて眠らう エーアイの学習を繰り返す日日それらすべてを抱いて眠らう 悪戯も食ふに困らぬ通学路それらすべてを抱いて眠らう

浮

橘 高な つ \Diamond

デパー よれよれのリボンほどいていくような雲をただ消えるまで眺めた 汗だくのデニムを脱いだままで寝る部屋から見える空は黄色い 目を閉じておいでよって笑いながら離れてゆくのでしょうあなたは 雨の日は犬のにおいを嗅ぎに行こう、 本当の気持ちをつづる日記には読みづらい文字ならべてしまう 憂鬱を辞書で調べてまで書いたとびきり柔らかいエンピツで 終わりかけの物語みたいだからカレンダーをめくるのはゆうう トの屋上で乗るパンダより遅い速度で近寄るけれど なんて誘われたら浮かれる

実数で生存をするおれたちのはるか頭上に宇宙は暗い 愛し合う、濁音符もなくあいしあう手が触れていてばかみたいだな 疑わず「はい」と言い切る相聞の主体のようなツイートをした 快楽としての描写のセックスを斜め読みして食うチョコレー 馬鹿みたい/馬鹿見たい さわれない愛の温度をなぞらえておまえの首の角度の柔さ わかるからわかると思うわからないものはわからない 人称と性別だけを数えてもなれないものとしてある星座 とはメリーゴーラウンドよりも軽い言葉だ 明日も猛暑日

久助

学生の作文に朱を入れ終へて吾が手を見れば赤く染まれり 梅雨晴れに十色の虹は架りけりジェンダー論の講義は熱く ゼミ終り教へ子たちに出喰はしてドリンクバーで人間になる スライドの光に右の肩は濡れ透きとほりたり午后の教卓 延々を永遠と書く子らとゐてわが日本語は液状化せり マドロスのやうに片足教壇に掛けて漕ぎ出すことのはの海 波音とかいてはのんといふ子ゐて詩集読むごと出席を取る 「先生は皆が教授ぢやありません」くすぐつたさを押し留めつゝ

> 駅ナカの奥の書店のレジ前でカバーを辞退してる横顔 雑踏は今日もじょうずに歩けないスクランブルをひとりで進む 人ごみで大事なものを見失う副都心線につづく地下道 この恋はおわりが近いあのひとはメトロの窓で目をあわせない いつからか降車優先まもらない別人みたいな背中を見てる 駅チカの古いビストロあのひとはパセリをのこす添え物だから のぼりゆくエスカレーターえんえんと闇をぬければ渋谷のひかり 乗り換えを嫌うあなたの誠実はカーブをえがき乗り入れてゆく

特例子会社③

須紗 里 菜

- 10 -

郵便を社内に運ぶ誰にでもできる仕事の影の役割 障害者を雇う職場は一箇所と会社が決めた特例子会社 職業詠をいつかまとめて本にするそれが私の歌詠む野望 コウモリに似ている私は見た目なら普通に見えて健常じゃない 憐れみに似た表情をやや浮かべ視線をパソコンへ戻す人いて お遍路をしているような音を立て揺れる台車で運ぶ宅配荷物 障害者の身分を示す制服のシャープペンシルを二本さすポケット -ビスをするためにある子会社と本社の社員は本音をもらす

独学で覚えただけのフランス語どこかの町に置き忘れたり

多香子

瀧口美和

竹林ミ來

戦争に学ぶのでなく平和から何かを掴む時代来にけ

学習の機会がなくていつまでもむくのが下手すぎるゆでたまご

ひび割れた砂地に並ぶコロニーで空は七色だったと学ぶ

寄主を殺さぬように食べていく幼虫よりも拙き人は

論説の隙に寝覚めの花の香のエロスを学ぶ国語の時間

まだここがわたしの居場所ねじひとつ分高くする学習机

学び舎と呼ぶには狭く空き缶の降り積もる納屋 ふし穴に月

学びでもモラトリアムは存在しサナトリウムの床に寝そべる

誰とでも分かり合えない8月の日差しは痛いことを学んだ

夜制の 「昼」が今年も良い歌で聞き惚れてるよ、 モード学園

あのころは永久にも近い気がしてた学習帳の厚みの薄

大学の隣に植物園があり猫がときどき塀を越えていた

またひとつ季節がめぐる通学路ひかりと一緒に遊んで帰る

千原こは

ぎ

chari

ともえ夕夏

月硝子

中村成志

成瀬悠

にう

西淳子

西村曜

ネコノカ ナエ

薄荷

お気に入りのジョー

果てしなき知の階段を上る旅 そろそろ私も再開しよう

学校に行けなくなった兄と飲むホットミルクは膜も美味し W

ッ プ ヴァ シ ウィ ンクルを読むこども版世界文学全集の悦楽

雀來豆

石

夜 花

西鎮

詩

季

た

ーの泡にたとえた言い訳で文学的に終わるこの夏

て の リ

好きではない が休 むには抵抗があり遅刻ば か

たえなかすず

セサミスペ

ス

М

クが滑つて学生のせいにしてゐるベテラン教員

久

助

感情のままにクラスで担任は持論つぶやくツイ ートのごと

放課後の子ども扱いくるしくて学生服のボタンをはずす ル クスも知らぬ子ら居る学び舎はポプラの枝も淋しからず

ンパ スをえ知らぬ子らにひさかたのフードバンクの灯のか なしけ れ

紫苑

汐

射

 $/ \setminus$

ル

カ

佐藤氷

魚

こうげつ

ずり

玖嶋さく

5

秋の 道小さき人と歩くときわたしもほのかに哲学する人

胸に渦巻く黒い 狂気さえ美学に変えてワタシは進

学校は好きじゃ なかった学校で会えるあなたが大好きだっ

学び舎といふは名ばかり戦場は今日もこどもがひとり傷つき

せ

()

寿々多実果

学校は りさ

佐藤氷

魚

長い長い夢が蕩けてくちづけは朝靄に浮くひかりのように 逆波に舵を切っても最後には星のさだめに従うでしょう 暗闇の砂漠に弱く突き立てた繊月ひとつ崩れゆくかも 堅牢な盾を掲げた身体ごと静かに沈む陶酔の調 望むなら耳にもなるし翼にもなると誓った指輪が光る 半月の刃にふれてさびしさの血を盃に分けあう夜半 モザイクの水玉の散る噴水を映してもなお熱い瞳よ 平衡を欠いた王子は理不尽なアルペジオめく波に溺れる

暑さにもどうにか耐えて生きのびて残りの夏をひとつ減らした 戦争じゃなくて病気で滅びたらまだ悲しんでもらえるかもね 人ならばおばあさんだという象は囚われたまま長生きをした 冷めたあと温め直し温まるでもまた冷める生きてないから 九割はまだコップでもあきらめてネットで捨て方を確かめる

無常

ろだたけ

陶酔

の湖

閉じ終えたハエトリソウの隙間からまだ生きている脚や触角

まだ履けるまだ履けるから履いているいくつか穴のあいたパンツを さわったら溶けだしそうでさわれないお菓子は朝に夢へと変わる

予

酒匂 瑞貴

熱を持つことの重さよ胸を這ふ汗が遺したかすかな疼き 風のある夏をえらんで巡り逢ふ蔦の模様の風鈴の音 はにかんだ笑みをするひと吾の底を蛍のやうにぽつと照らして ぎこちなくちやん付けされて吹き込んだ風にゆらりと乗る青き蝶 性欲のない恋はない真黄色になつたゴーヤを縦向きに割り 恋じやない 性交のない恋もある吾を映し孔雀の色に揺れるみづうみ かつて愛してゐた人のにほひ持つタオルケットの揺れるベランダ これは予感だ生活となるために咲くコットンの花

ぼくはナツヤスミ

汐 射 $/ \setminus$ ル 力

水温く 最後尾ぼくは馬群に入れない睡気眼でシンガリ勉む ゆめに見る榎本喜八 下町の光の球場弾丸ライナ 校長の話の長さモンスーンわが身は湿気るながめせしまに 大空のソフトクリ カーテンが揺れて港湾がみえる丘あの子の裾も風になびいて 喧噪がとたんに止んだ靴音に物理教師はスネイプみたい ひだりがわ並んで疾駆る形相はあと10メー **ウェ**跳び込む波を裂く地獄の釜にあいつ溺れる ム隆々と直下のまちは濡れ頻るんだなぁ トル抜かせるもの

指差して森の高さの遠く上うまれて直ぐの星を見るふり おろしたてブラウスで待つ溢れ出る予感をふわり袖に隠して おろしたてブラウスで待つ溢れ出る予感をふわり袖に隠して あいものに触れたい真夜中にそのためにだけ磨かれるシンク もう一度再生せよと指先の傷の痛みは誰のコマンド? もうし、接客様式携えて老舗蕎麦屋の暖簾は重い 新しい接客様式携えて老舗蕎麦屋の暖簾は重い

の断片

夏

鹿ヶ谷街庵

メロンソーダの氷をひとつ沈めてる来ない恋人沈めるように 場去形でいじめを詫びられ戸惑った現在形で殺したいのに 過去形でいじめを詫びられ戸惑った現在形で殺したいのに でかれたりあつめられたり光ったり数多の歌手が世話になる風 でかれたりあつめられたり光ったり数多の歌手が世話になる風 でかれたりあつかられたり光ったり数多の歌手が世話になる風 でかれたりあったまで飲む夜と鶴瓶が混ざった麦茶 に降る雨を見ていた くちぶえできみがサザンを吹いていた海 はいるのでとったりとったりを でいたいのに なるだろう Gを殺してハグされたこと たったりなった現在形で殺したいのに はらした豆腐の角で殴られて死んで落語のネタになりたい

遠くから来て遠くへと去るはずのぼくらは青海波が懐かしい

半透明のラムネの瓶にくちびるを添わせて夏を終わらせに行け テーブルを濡らした結露水よりも涙がぬるい訳を教えて 三日目のカレーも朽ちるころだろう蛍光灯へ羽ばたく羽虫 炎天の脱け殻のごとよこたわる蝉をほどいてゆく蟻の群れ くちびるの赤より紅い鬼灯をそっとひらいてやる帰り道 坂道の向こうに見えるはずのない海にもう一度行きたがってた 託された未来みたいに不確かなきみの産毛は雲を背負って 掻く前にムヒ塗りなさい八月の一度もほんとうのことを言えない くらくらと小鍋に煮える茹でたまご待つことは時に必要である ほろ酔いで本屋を歩いたうっかりと○○○○○の歌集を買った うなだれて向日葵の咲く季節には礼儀正しさを正義にはせず アメリカンチェリ あなたには大切な人がもういるねさるすべりまだ咲いているね 快速に乗れば一時間の距離を月より遠いと言われてしまう かわいいと思う会うたびよれよれになっていくしかないワイシャツを 青海波 -ころころほおばってどこかに行きたいわけでもなくて 西鎮

教科書のすみパラパラと動き出す似てない似顔絵のぼくときみ

学ぶ間にペン先は別の輪を描いて趣味のことだけはかどっていた

線をひきひきなおしてる身体の学びの空の空白の点

影が消えざわめきもまた遠くなり 西日に染まるからの教室

診察に医学生らの立ち会えばなんとはなしに緊張のする

中学生男子のような塊を裂いてしめじを肉と炒める

トリケラトプスが草を食みおる夏の午後少年われは恐竜学者

Bダッシュからの大ジャンプ 学校というハードルは意外と低い

廃校の壁にモモンガ巣作りし 親から学び仔の初飛行

流木に座り鴉の羽根ペンでノートを綴る鷺は湖中に

面白く生きる術すら教えない学術書なら破いて捨てる

二丁目の少し足りない学君発達に障害を疑ふ

(ノスタルジア?) 息を殺した学び舎に登らなかった屋上がある医学でも倫理学でも説明はできず感染それが何なの

◆ 泳二

- ♦ hs
- ◆ 岡田濫

小 椋

杏

- 小澤ほのか
- · 音平まど
- * 神ヤ飛ビ魚

貝澤駿一

- ・唐草もみじ

涸れ井戸

河岸景都

- ◆ 菊池洋勝
- ◆ 君村類

砧

学ばねば解らぬことが多々あって手の届かない巨大な書物

学ばないマナブとさらに実らないミノルが春に我が部署にきた

投票の ために出かける中学の体育館がよそゆきのか

時

もう二度と読めないはずの文字が揺れ胸に落ちてく期待させない

験紙

学校で学んだことを生かせずに裸で生きていけたらい

舞台から一番遠い部屋にいてかがやく人に光線を打つ

学食のうどんが特にまずかった思い出したら笑えるくらいに

学校の屋上みたいな人ですね 反対向い て叫 んだりし 7

法学の レジュメ 払われて伸びた血 七夕はもう来ない 12

フェ ル ジー ル 0) 『天文学者』 と『地理学者』こころに対に置く夕つかた

学問 の歴史はバ べ ルの塔である階段を降りる子供の 叫 び

女の 子だからといなす透明な呪縛 のため 0) IJ トマ え試

回答を読み上げるきみの聲だけが今のわたしの

世界

の正解

いな

相河東

あ き子

倉ゆえ

雨虎俊寛

天野うず

 $\langle \mathcal{N} \rangle$

新 井 将

有村 桔 梗

歩

歩

五十子尚 夏

石 川順一

葉子

藤すみこ

宇祖田都

子

ナミ スペ ス М

愛とあなたが言うときゴーギャンの猫が残していくような喉 硝子扉をひらけば夜の匂いたつ書棚にジャックとエレナ眠れり 今日ケンタッキーにしない?チラシでつくる折り紙の自転車、 髪が目にかかっていてはいけないと言うとききみは何を読んでいるのかな? のどのどと背中に羽の生えているねずみあなたを齧って逃げる お互いの不幸を交換しあうときあなたがぼくの代わりに得たもの 図書室に大百足来てかすかなる雨のにおいす午後のうすやみ イタリアのピンクのスポーツ新聞を読むとききみの美しい舌 サドルから燃えてゆく

機械式天使の憂鬱

Ó 石 夜

花

愛だってワタシにはよくわからない求められても困るだけだわ この顔も声も翼も感情も所詮はただのツクリモノなの 嗚呼いっそ悪魔になれば君たちは殺してくれる?この孤独ごと 神様のようにワタシは人々を救おうなんて思ってないの 天使様なんて勝手に呼ばないでワタシはただの機械なんだよ 神様は残酷なんだワタシだけ残して先に壊れちゃったの 永遠に終わることない命など退屈なだけもううんざりよ 幾千の夜空を巡り探しても見つからないの死に方なんて

葉っぱのうう

雀

來豆

オフレコで

滑り台大人な僕は滑らない太もも燃えて流せソウメン おじさんは葉っぱのうらに隠れたよ おとうさんもやさしく手をにぎられていじめられてる宇宙のおわり スマホは魔法みたいお金もらえないけどポイントもらえる社会 高円寺で降りてすぐにコーヒーを買って飲みほしての喫茶店 誰もみえない灼熱をまっすぐに風の音だけ聴いて歩けば つま先をそれほどまでにのばすとねケーキにさしたフォー なつ休み肩くみ歩く女のこサンダル履きの日傘一輪 きょうはそのまま帰らないでね クのようだ

過

たえなかす ず

その昔、 星涼し ピースピース、 あした起きる奇跡を期待する前に今日の出会いを奇跡としなよ 相槌を打たない猫はなお眠り天動説のただなかにいる ほらごらん名もなき花が咲いていて名もなき人が恋を終えるよ Wi-Fi がつながるように感度あるひとを見つけて恋をしないで くちびるをとがらせる前の表情が夏らしかったか思い出せない 別れを告げられた夜もグラビアみたいなフリ ついに敬語になったひとだけど冷たくしてくれぬひと すべてをきみが忘れ去り思いとどまるまで笑うから ーズでした

市工夜の月中天にかかり来て猫と見上げる縁側涼し 十五夜の月中天にかかり来て猫と見上げる縁側涼し 大石での月中天にかかり来て猫と見上げる縁側涼し 大石での月中天にかかり来て猫と見上げる縁側涼し 大石での月中天にかかり来て猫と見上げる縁側涼し

父の口癖

田圭

再びの驟雨に声は聞こえねど消されずにあり虫の息吹は思ひ出し笑ひのやうに雨は降り主なき世に畑を濡らす 電鳴と雨音消えて聞こえ来る調子のずれし蟋蟀の声 な唱は合唱となり蟋蟀は声の調子をそろへゆきたり な唱は合唱となり蟋蟀は声の調子をそろへゆきたり ない歌雨に声は聞こえ来る調子のずれし蟋蟀の声

> 草原と宇宙のあわいに立ちおれば僕は大気に寝そべっている は河色した悲しみの果てにあるビッグバンってなまあたたかい 近づいてきた隕石は夢を見ている夢を見ている永遠に 時という概念すらも突き破り光は届く裏の裏まで ここだ、って分かって頬を撫でている夏の夜空に手を伸ばしてる 足の裏から手の先へエナジーが迸るもう泣かなくていい 星々は金平糖をもとにして作られたのでとてもやさしい くたちもいつか星座になるのならその日のために輝いている くたちもいつか星座になるのならその日のために輝いている



多分そう 多分そう 多分そう 多分そう 多分そう 多分そう 多分そう 多分そう 夏影を踏むサンダルは扉を開ける合鍵だった 美味しいときは美味しいという顔をするそれだけでいい この世に生まれてこなければよかったと言う子の唇は 子は白鳥か湖を磨く羽にはやい刃を隠す なずきの中の人を描く子には見えども我には見えず 半日以上眠る子の部屋はゆりかご揺れないけれど いまだ迷路を出られない必要なのはスモールステップ 人形は兄「おかえり」と迎えるいつもの本棚の上

蒸し暑き夜を幾つも耐え抜きて蓮の実はぞわぞわと育てり、これを眺めてをりぬべランダの手摺は越えてしまはぬやうに蓮池を眺めてをりぬべランダの手摺は越えてしまはぬやうに蓮池を眺めてをりぬべランダの手摺は越えてしまはぬやうに蓮池を眺めてをりぬべランダの手摺は越えてしまはぬやうに

天気雨 日傘雨傘兼用を支えにひとり曝されている 大気雨 日傘雨傘兼用を支えにひとり曝されている 大気雨 日傘雨傘兼用を支えにひとり曝されている 下気雨 日傘雨傘兼用を支えにひとり曝されている 大気雨 日傘雨傘兼用を支えにひとり曝されている 大気雨 日傘雨傘兼用を支えにひとり曝されている 大気雨 日傘雨傘兼用を支えにひとり曝されている 大気雨 日傘雨傘兼用を支えにひとり曝されている



さよなうサマーさよなう

竹林ミ來

有名なつけ麺屋並みの行列をミスドがつくる ここは郊外 有名なつけ麺屋並みの行列をミスドがつくる ここは郊外 有名なつけ麺屋並みの行列をミスドがつくる ここは郊外 でたい缶が濡れていくとき「水だけを出す技」と言う 地味すぎる技 がたい缶が濡れていくとき「水だけを出す技」と言う 地味すぎる技 をいいるのに避暑地のほうが来てしまう お盆にそっと春物を出す ないのいリュックのハートチャームに書いてある言葉はSECOM ここは東京 な子のリュックのハートチャームに書いてある言葉はSECOM ここは東京

海をもちたい

千原こはぎ

内側に深い深い海をもちたい無いものを羨まないように内側に深い深い海をもちたい無いものを羨まないように呟くやわらかなショートカットがゆれている夏でもきれいでいられるひとだ立ち位置を気遣うように手のひらが微かに触れて わかってしまうかたしだけ真夜中みたいに俯いてひたすら降りる駅を待ってるわたしだけ真夜中みたいに俯いてひたすら降りる駅を待ってるわたしだけ真ない知らないふつと言葉を煮詰めるように呟く

茅 野

8首の連作 自由詠

野鳥記

chari

山翡翠が来ていた頃の畔には朝靄 紫陽花 貴女があった 内側を振り向くようにがらんどう欅の洞に棲む鳥はなく 内側を振り向くようにがらんどう欅の洞に棲む鳥はなく 助手席で雛鳥となる君を抱き「卵に還れ」と呟いてみる 動り羽虫を喰らう燕の懺悔のように赤い喉元 翻り羽虫を喰らう燕の懺悔のように赤い喉元

縁日のお面売り場に薄明かり灯れば並ぶ亡き人の顔 不意に始まる磯野家とフグ田家が水底でアマビエに会う話 夕まぐれ九官鳥は目を合わせ未知の叙事詩を歌い始める 事故物件でも支障無い寝室の天井で笑む老女以外は 知らぬ間に建つコンビニの地鎮祭見たためし無く にわか雨近き気配に蝉時雨止んで街路は虚ろな時空 目に線を引かれた群れの隙間から忘れられない顔が見つめる また少し髪の毛が伸び大人びた返品棚の日本人形 灯に群れる翅

次があるとは思って Ü

堂 那 灼 風

またねって言い慣れながら本当は次があるとは思っていない 生と死の定義を前後させながら、させてるうちは生きてるわけだ 大陸を薙いでとまった蝗害とイナゴの害は違うとかいう この川は死んだと人の言うときの濁ってつづく川の姿を 吹いたでしょ
さっきの風の感触をちゃんと憶えていたいのだけど 約束は宣言だから口にするただ一秒に満たないまたね 灯された火は尽きるまでそこにあり話しかければすこし身じろぐ うたかたは美しすぎる比喩である泡のかたちは完璧なまる

> 進学か就職それとも起業まあ人生は一度きりですから 誰もまだ知らない新しいわたしになりたいぱりぱりのクロワッサン 覚えたい数学公式トイレにも貼り受験生らしいぢやないの コンビニのアイスカフェラテ吸い上げる私立高校見学帰り がんばろうがんばろうつて思ふほど眠いさういふお年頃です 女子校の旧き校舎のうちがはは子宮のやうな桃色をして 夏草を踏み分け進むつはもののごとレールバス一両編成 ともだちと自分をすつぱり切り離しひとりで模試を受けにいく朝

ナザ ルボン ヂ ュ

ф 村 成

- 16 -

東よりつぎつぎ生まれ来る雲よ土耳古の魔除けの白目すずしく けれどやはり覚悟は覚悟でしかなく針の返しが皮下へとしずむ 葉月はづき人魚の髪を傷口へ擦りこむように午後の陽光 部屋うちに肺魚十匹蟹五匹潜むがごとくこの空調は 剃刀の刃を押してみるかみそりはあまり切れない押すだけならば 寝転びと微睡みの窓 草刈りの音に遅れて香の吹かれ来る 鳥が鳴く窓がうっすら白くなる朝が来たんだ(畳以外に) ーンのフックゆうたり8の字に振られて藍の夕暮れの末

-の助の 「こわい短歌」

六浦筆の 助

浜独り歩くビキニの人につく大中小の身なき足あと 亡き後に家具のみ残る部屋行けば婆やのベッドに真紅の肌着 「いつまでも一緒にいてね」と腕を抱く君の浴衣に血の痕増えて 君と来た温泉街に愛と死の「キイハンター」が静かに流れ 黒髪の君と食べてる焼きそばに混じり増えてく元カノの茶髪 置き花火ねずみ花火す傍らに「不発弾出ました!」の立て札 すくすくと育ってこぶし二つ分の金魚が密に泳ぐ水槽 「かき氷あります」を見て注文す氷のシロップ生臭く、 赤

花嫁とピスト

/ 厩めれ う

草むらの鳩追い立てる男子らに混じりて遊ぶあれは野兎 銀玉のピストル腰に挟みつつ男子を追へるあれも野兎 夏雲は近くの像をほどきつつ遠くの像でくきやかに立つ からたちは棘とおんなじ数だけの花が咲くから見てゐてごらん 白ければ撃たれずにすむ野兎も花嫁衣装を着ればなおさら 開封をしたるやにはに飛び立てる鳩の脚へと結ぶ復信 一面の死海のごとく平らかに舗装されにし草むらのあと ひぐらしの仰向けざまに日は暮れて死にゆくものの怒気を笑へ

8首の連作 自由詠

眠いディナー

村 田 一広

どんな具が混ざつてゐても終の一滴までシチューを掬ふ匙 薔薇は怒りふくむ紅 動かないけど生きてゐる 縮まれる 震へてる 猫 輪郭もアイデンティティも曖昧な私が描いた水彩画 夕食は庭で食べよう焼肉の煙の中の夏を味はふ もう眠つてしまつたの? 穴が二つしかないとやや息苦し四つの穴でボタン深呼吸 林檎とふあれは脳みそ(落ちようか落ちまいか千年迷ふ木の枝 純金の花瓶が蒸気あげて沸き立つ いつしよくたに皿のディナーを袋に詰める 雨が弾ける

更年期

P ゆき

暑いのか寒いのかすら分からない更年期の腹温める犬 ポンコツな体を呪う指先は冷えたことすら気付けずにいる 寝返りを打つたび熱は移動して暑いと寒いを繰り返してる 籠る熱吐き出すことができなくて氷をかじる 吹く風が涼しくなって秋だねと爽やかな君汗だくの吾 「アイス食う?」笑顔で聞かれ首を振るわたくしは今北極にいる 私だけ長袖を着て膝掛けを肩に掛けつつ紅茶を淹れる 家族とは温度差があり犬にさえそっぽを向かれ冷房が寒い

選手宣誓に立つ少女よ迷いなく天を撃つ日の向日葵に似て

世界中、そう世界中はいチーズ、クッキー、なんでもいいよ笑って迎え撃つパンダも歩くさくさくと(C'est bon.)一番星が輝く迎え撃つパンダも歩くさくさくと(C'est bon.)一番星が輝く早々に心が折れてポッキーはもう帰りたいグリ高原へ早々に心が折れてポッキーはもう帰りたいグリ高原へ早々に心が折れてポッキーはもう帰りたいグリ高原へ早々に心が折れてポッキーはもう帰りたいグリ高原へ早々に心が折れてポッキーはもう帰りたいグリ高原へ

な つ

八月雑詠

三浦

猿の親子

牛乳をたくさん飲んで七歳は「牛の子だね」と軽やかに言う情報の小さな姿のおさなごはたとえば虫をかんたんに踏む食卓で質問ばかりする子から「なんで生きてんの」って問われる食卓で質問ばかりする子から「なんで生きてんの」って問われる食中で質問ばかりする子から「なんで生きてんの」って問われるでけづくろいしてあげるよ」と子が櫛を当てれば我らは猿の親子に様れしながら話す一日の日差しを浴びた子の髪を撫で味れしながら話す一日の日差しを浴びた子の髪を撫で中乳をたくさん飲んで七歳は「牛の子だね」と軽やかに言う様枕しながら話す一日の日差しを浴びた子の髪を撫で

虫武一俊

ヴァーサス

成瀬悠

水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛りし花火とは唯我独尊この心得なり水中でも燃え盛り、

七月の短歌日記より

西村曜

を過ぎる「ためらい傷」ということば一番くじを四回引いて ま馬灯、あんがい地味と笑いたいあなたとの帰宅シーンばかりで こころぼそい青のマニキュアのテスターを試すだけして地下街を出る 地下鉄の座席に浅く腰掛けるリサ・ラーソンの船を抱えて 地下鉄の座席に浅く腰掛けるリサ・ラーソンの船を抱えて 地下鉄の座席に浅く腰掛けるリサ・ラーソンの船を抱えて がたくなに「ほね!」と言い張り幼子はさくらんぼのたね弄りつづける かたくなに「ほね!」と言い張り幼子はさくらんぼのたね弄りつづける

夢枕れむ、夏の夜の夢(タヌキ連れ)

西淳子

夢が溶ける。れむの寝起きはぐちょぐちょのアイスクリーム・コーンなんですないって食べれるんすねきみの大三角形を舐める夏の夜切いって食べれるんすねきみの大三角形を舐める夏の夜日と勝9005敗20分 げんこつやまのタヌキはつよい使用済みコンドームだとおもったらおっぱいアイスの亡骸でしたはのっちばらながでしたけが高ける。れむの寝起きはぐちょぐちょのアイスクリーム・コーンなんですながでける。れむの寝起きはぐちょぐちょのアイスクリーム・コーンなんですなが高ける。れむの寝起きはぐちょぐちょのアイスクリーム・コーンなんですが溶ける。れむの寝起きはぐちょぐちょのアイスクリーム・コーンなんですが溶ける。れむの寝起きはぐちょぐちょのアイスクリーム・コーンなんですが溶ける。れむの寝起きはぐちょぐちょのアイスクリーム・コーンなんですが溶ける。れむの寝起きはぐちょぐちょのアイスクリーム・コーンなんですが溶ける。れむの寝起きはぐちょぐちょのアイスクリーム・コーンなんですが溶ける。れむの寝起きはぐちょぐちょのアイスクリーム・コーンなんですが溶ける。れるのですがある。

8首の連作 自由詠

信号機を選ぶ

ネコノカナエ

渡りたい海峡はある一車線道路でさえもためらうくせに渡りたい海峡はある一車線道路でさえもためらうくせにはったい。人ナラバ信号機観ツラヌケヨもしかして俺責められている。「は信号機観ツラヌケヨもしかして俺責められている。「は橋とボートの見分けもつかずただ俺はたたずむばかりただただ眠いなんが信号ですか信号機観が違えばロボットですかどこまでが信号ですか信号を支えるやつは信号ですかどこまでが信号ですか信号を支えるやつは信号ですかどこまでが信号ですか信号を支えるやつは信号ですか

蝉よりも知人の知人が多く死ぬあるいは死んでゆく夏でしたエアコンがなくても涼しい朝がきてやけに静かでやけに無人で

天の川忘れ物市さみしげな缶ドロップのなかにシリウスカラフルなマスクを救難信号のように並べて隙間で眠る

まだですか、とだけ問われて第一子よりもタブーではないワクチンマリトッツォ嗤う嗤うよ八月に根を張ってゆくプロパガンダを拍手するすべての人が憎くなるような気がしてテレビを消した

体温を分けあって眠る室温が二十七度のせまい部屋で 恐竜の記憶を持ったわたしたち時々たまごの形で眠る 砂粒を運んで岸へ打ち寄せる波のようなあなたの心音 首すじをくすぐるように撫でられて三六度五分の微睡み それだけの関係でした常温のジャスミンティーをわけあうだけ 水のように指の先からじんわりとあなたの温度がわたしに馴染む -テンを揺らすそよ風真っ暗な熱帯夜には魚になって パンチ花火のように煌めいてあなたの指の温度が恋しい Ó

月 < 5

早

よぎる季節

彩りが足りない冷やし中華には短冊切りで夕焼けを盛る この夏を濾過した白のTシャツは夜明けの街を、海を知らない とけかけのビニールプールをつぶすとき初夏の空気は秋空を知る つまさきをタオルケットに差し込んで夜の空気はひやりとゆれた 溶けてゆく氷があまく映す空 しずけさの持つ意味をきかせて 窓からのひかりがすべて 閉じられたここは天国2℃の コーヒーの香りをつつむきみの指 雨に白く煙った上空で神は蛇口を5回ひねった ほどけそう ほどけそう ほどけた

> 赤色棒振る僕 献杯を終えた伯父から逃れ出て輪を吐く 元素記号変わらぬ死体 焼き場から昇るモル数星ぼしの数 子扉を初めて開けた玄関を越える棺のかすかな震え 下顎で刻む白寿の拍動が今まさに止まる 車イスお先どうぞ。と青の杖済生会の西エレベータ 敷地内に葉桜歩道から眩しく三センチまで吸って病棟 小卒の赤トタン屋根の安普請夢を築いた祖父母のあの日 空車で走る父 二人の夜の空は高めだ 法事を終えたら夜勤 息つき静寂

-和はじま

廣珍堂

- 18 -

高き陽は洗濯板の波となりおしめを洗う腕を照らしぬ 電蓄は七十八回転の渦ノイズが共に盛り上がる場所 豆炭の一尺角の炬燵へと親子三人足を入れ寝る テレビでは垂直・水平同期なるツマミが探す遠くの画像 大君の写真がここにあったらし奉安殿跡で男女戯れ 汲み取りの便所に落ちた少年は今日も変わらず教室を駆ける 磨かれたラジオは居間の隅にあり玉音放送伝えたといふ 混乱期に使われたのかヒロポンの青い注射器ひとつ眠りて

チ ンスター

Ш

痛みなどきみを忘れる理由にはならない さざなみが引けば赦されるのでしょう深呼吸して見渡せば闇 暴かれることも是としてこわごわと触れてくるきみと指をかさねる 優しさに狂ってしまう真円の満月ぽたりぽたりとおちて まぶしくてきみの瞳の深い紅 とめどなくわたしの海は打ち寄せるまるごとぜんぶ飲みほしてほしい やわ肌を破いて触れて奥底の想いに気づいてなんて傲慢 人間は間違うものでともすればきみも人間なのかも知れず 流れ星みたい置いてかないで 熱を帯びる傷痕

学園祭

まさけ

この際と無理やり彼を連れ歩く中央廊下に吹かすはるかぜ 「オマエ、男装似合うのな」驚き跳ねるわたしの燕尾 スマホ持ち群がる女子に原爆を投下しようと即決をする わたしよりキレイな彼の生足を必死で隠す 折れ線の話は多分筒抜けで赤くなってる彼の友人 スカートの丈と利益の関係を折れ線グラフで論じてる彼 女には関心なしのあの主将さえまごつかす彼のスマイル いつだって真面目な彼は学祭のメイド姿で男子を射抜く かわいいな、 くそっ。

月の絵日記

藤田美香

夏休みのある職に就いたことはなくそれが普通であれば盂蘭盆 尾崎豊よ私に乗り移ってくれ窓ガラス割った次の日のこと どこまでが薄着と許されるのだろうキャミソールだけで洗濯を干す 急に身を乗り出してくるスーパーに行きしの道の黄の彼岸花 駅までは全速力で行かないとそれが重い足取りだとて 人んちの屋根から見下ろす束の間の肝試しだった ああ夏休み トイレのドアを言っても言っても閉めないのでいっそ外した。なんで怒るの と言ってしまってそれから何事もなかったように夕立に遭う

8首の連作 自由詠

夢でさえ張りぼての海

茉城そう

淀みから産まれた春のいとしくて掬い出す間際のカンパニュラ 心臓がさみしがるほどさざめくのフラッシュを焚く音で目覚める 重力に逆らってこそ夢なのに交わることなく回る木馬 回送のとき低く鳴る踏切の向こう側からゆっくりと夜 あてどなく踏み入る浜辺あたたかく沈む踵に春が追いつく まってるよ破滅、と口が動くのを対岸から見ていて 角張った背中にひたい押付けて見たことのない花というだけ 張りぼての海はすぐそこトンネルで入闇転生しよう、約束 着火